

しょう みず き
小水城

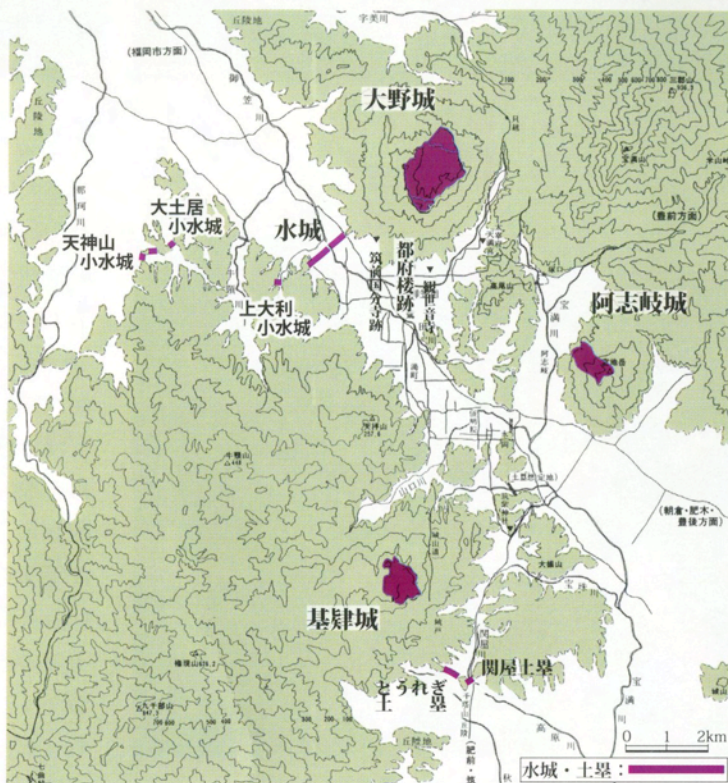
大野城市教育委員会

西暦 663 (天智 2) 年の白村江での敗戦を契機として、大宰府政庁周辺に水城跡や大野城・基肄城などが次々と築造されたことが『日本書紀』に記載されています。664 年に築造の記事がみられる水城跡は福岡平野の最も狭い部分を塞ぐように築かれています。この水城跡の西側には牛頸山から北側にのびる丘陵地帯が広がっています。このような丘陵の谷となっている部分を塞ぐように水城跡よりも小規模な土塁が数箇所で見られます。これらの土塁を小水城と呼んでいます。

水城・小水城が築かれた 7 世紀中頃の朝鮮半島は

高句麗・新羅・百済の三国が割拠し覇権を争っていました。その中で新羅が中国の唐と連携して百済を滅ぼします。そのため、それまで百済と親交のあった日本(倭)は援軍を送り百済復興をもくろみますが、白村江で唐に敗北を喫します。この敗戦により百済の復興は失敗に終わり、唐と新羅が日本にも侵攻してくることが危惧されました。そのため、水城跡や大野城跡をはじめとする防衛施設が大宰府周辺に築かれることとなったわけです。このような防衛施設築造の一環として、小水城と呼ばれる一連の土塁群も築かれたものと考えられています。

水城跡のように博多湾側からの侵攻に備えた土塁は、大野城市の上大利小水城、春日市の大土居小水城・天神山小水城などがあります。これらの他にも小さな谷を塞ぐために土塁が築かれていた可能性もあります。博多湾に面して作られた土塁に対し、筑紫平野側にも佐賀県基山町の関屋土塁・とうれぎ土塁など小水城と同様の性格を持つ土塁、さらに南の久留米市には上津土塁があります。これらの土塁は、有明海からの侵攻に備えたものと考えられています。



大宰府周辺の関連遺跡 (阿部義平 1991「日本列島における都城形成」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 36 集より改変)



上大利小水城（北側より）



上大利小水城土塁下部出土木杭（南側）



大土居小水城全景（春日市教育委員会提供）



天神山小水城全景（春日市教育委員会提供）

上大利小水城と大土居小水城などで行なわれた発掘調査の結果から、土塁の構造が一部明らかとなっています。上大利小水城は高さ約2m、最大幅約15m、長さ約80mが現存していますが、盛土は丁寧につき固めながら積み上げられており、土塁下部からは土留めの木杭が出土しました。また、高さ約8m、最大幅約40m、長さ約75mが現存する大土居小水城では木樋と呼ばれる導水施設が見つかっています。土塁の北側では水城跡のような濠は見つかっていませんがぬかるんだ状態であったと考えられており、敵の侵入を困難にするという意味においては基本的に同様の機能をもっていたと推定されます。このように小水城についてもその構造や築造技術が明らかになりつつあり、上に紹介した特徴の一部は水城跡ともよく類似したものです。このような築造技術や構造の類似性からも、7世紀後半における対外的緊張に対して水城跡とともに博多湾からの敵の侵攻に備えた防衛施設の一部をなしていたことがよく分かります。